

この女学園に入って、わたしの体はふたなりへと変化していきました。

おちんちんが生えた女の子…今では受け入れてしまったけれど、最初はイヤでイヤで仕方ありませんでした。

でも今は、生えてきて良かったんだと思っています。

射精があんなに気持ちいいなんて、想像すらしませんでした…♥

それを知ったときのことを、話していきますね…

わたしはずっと、股間に生えてきた謎の突起に悩まされていました。

入学初日から何日か経過しても、その突起は消えることなく、むしろ少しずつ大きくなっていました。今では五センチほどの大きさになっていて、無視するにも限界が来ていました。

触ってみると、なんだか変な感覚があって、わたしは出来るだけその突起に触れないようにしていました。

(どうしよう……これ、まるで男の子のおちんちんみたい……こんなの、誰にも相談できないよ)

幼馴染で親友であるはずの愛衣や撫子にも、恥ずかしくて言えませんでした。こんなものが生えている女の子なんて気持ち悪い、というのは自分が一番わかっていました。

わたしは共同浴場に行くことも出来ず、毎日部屋に備え付けのシャワーを浴び、その度に鏡に映る股間に生えたおちんちんのようなものを見てため息をついていました。

日に日に大きくなっている…このままのペースで行けば、取り返しのつかないことになる。わたしはようやく、保健室で診てもらったほうがいいのかもしれないと真剣に考え始めました。

わたしは中学生のころ水泳部で部活を頑張っていました。水の中を泳いでいく感覚が好きで、いつまでも泳いでいられた。他の人と比べてもタイムは短いし、この白百合女学園でも水泳部に所属しようと思っていました。

今はなんとかスカートの前がもっこりせずに済んでいるけれど、もしこの股間の突起が小さくならなかったら、みんなの前で水着を着ることが出来なくなってしまう。それだけは避けたいと思っていました。

まだ体験入部期間は始まっていないから、今のうちに何とかしなければなりません。

保健室で診てもらうしかない。嫌々ながらそう決めました。

その日、保健室に向かう途中も、恥ずかしさで何度も躊躇しました。

こんなものが生えてしまったところを、保健室の先生だとは言え見られてしまうだなんて、顔から火が出そうでした。

勇気を出して保健室の扉を開けると、すでに先客が待っていました。

「あれ？ 美姫……？ ちょ、ちょっと見ないでっ」

そこには保健室の先生の前でスカートを脱いでばんつも今まさに脱ごうとしている愛衣がいました。

どうして、先生の前でそんな姿に…その答えはすぐに閃きました。

もしかして、愛衣も同じ症状なのかもしれない。それなら納得がいきます。

「愛衣ちゃん、隠さなくていいのよ♥ 恥ずかしいモノじゃないんだから♥」

「で、でも凜先生、こんなの……変だし……」

「大丈夫♥ ねえ、美姫ちゃん、もしかしてだけど……あなたも、お股のところに、デキモノが出来たからここに来たんじゃない？」

「やっぱり……愛衣もそうなんですか？」

「そうよ♪」

お股におちんちんみたいなものが生えてきちゃうことって、よくあることなのかな？

困惑していると、先生はもう一つ椅子を持ってきてくれて、愛衣が座っている隣に置いてくれました。そして、わたしに腰を下ろすよう手で示しました。

「わたしのことは凜先生って呼んでね♥ よろしくね♥」

その先生は大人の女性の色気を醸し出していました。身体を動かすたび、羽織っている白衣の下に着ているブラウスの中で、とっても大きな胸がプルプルと揺れているのがわかりました。

すごくセクシーな先生だなと思っていたと、にこりと笑顔でこう言われました。

「お名前は？」

「美姫です」

「あら、愛衣ちゃんと同じクラスなのね。二人とも、とりあえず見せてもらえないと何もわからないわ。スカートと下着を脱いで、お股をわたしに見せてごらんさい♥」

「は、はい……」 「わかりました……」

わたしたちは顔を見合わせた後、揃って、凜先生の前で下半身を裸にしました。親友同士で一緒にお風呂も入ったことのある間柄でしたが、妙な突起のある股間を見せるのはとっても恥ずかしかったです。

ちらっと愛衣の股間を見ると、そこにはわたしのより二倍くらい大きな腫れ物が出ていました。

いいえ、それはもはや完全に男の子のおちんちんと言ってよかったです。先っぽが太くなって皮が剥けていました。さらに、わたしのおちんちんと違って、なぜかカチカチに固くなっているのです。

「美姫にもこれ、生えてきちゃったんだ……仲間がいてよかったあ」

「でも……愛衣ちゃんの、おっきいね？ さっきからピクピクしてるし」

「うん、なんかおかしくて……朝からずっと固くて、しかもムズムズするの」

愛衣ちゃんは不思議そうにそれを指でつんつんと触っている。

その様子を見て、凜先生はなぜか嬉しそうに笑顔を浮かべました。なんだかおかしい反応でした。

そして、凜先生はわけのわからないことを言いました。

「おめでとう、二人とも。愛衣ちゃんと美姫ちゃんは、今日から晴れてふたなりよ♥」

「ふたなり？」 「なにそれ？」

「おちんぽが生えてきちゃった女の子のことよ♥ この突起は正真正銘のおちんちん。男の子に生えているのと同じものよ♪」

「え……？」 「うそ、それって……？」

「これから二人は、メスちんぽ性欲に悩まされることになるわ♥ 女の子のことが可愛くてしょうがなくなって、そのおちんぽを触らせたり、舐めさせたり、しまいにはおまんこに入れたくなっちゃうの♥」

「は？」 「い、意味わかんない……」

「もう、普通の女の子としての生活は出来ないと思いなさい♥」

「ちょ、ちょっと待って！ そんなの、おかしいじゃん！ ありえない……ひゃんっ♥」
(10:02)

反論していた愛衣ちゃんが、突然妙な声を上げました。

見ると、凜先生におちんちんを手のひらで握られていました。根元のところを優しく手のひらで包まれ、ゆっくりと上下に動かし始めています。

わたしは知っていました。あれは、男の子がするらしい、オナニーと同じ動きです。

（ってことは、おちんちんをああいいう風にしごかれたら、愛衣ちゃんはもしかして、気持ちよくなっちゃう……？）

「やあっ♥ な、なにこれっ……♥ り、凜先生、やめてっ♥ それっ、なんか変な感じっ♥」

「最初は慣れなくても、徐々に気持ちよさがわかってくるわ♥ ほらほら、凜先生のおてで初めての射精しちゃいましょうね♥」

「射精……っ？ やあっ♥ や、やだっ♥ ちょっと、やめてよお……ん〜っ♥」

わたしはあまりの衝撃にしびれたように動けなくなってしまいながら、目を見開いて、愛衣ちゃんがおかしくなっていくのを見つめました。

しごいてもらっているおちんちんがどんどん赤く大きくなって、ぱんぱんに膨れ上がっていきます。

愛衣ちゃんは段々と目元がとろんとなってきたりして、なぜかぴーんと足を伸ばして、悶えていました。

「これ、なに……んにゃあっ♥　なんか、ゾクゾクするう……♥」

「いっぱい気持ちよくなっちゃいなさい♥　それはおちんぽ快樂よ♥　たっぷり味わって♥」

「だ……ダメえっ、き、気持ちいいよおっ♥　凜先生っ、シコシコするの、気持ちいいっ♪」

だらしのない声で喘ぐ愛衣ちゃんを、ただ口をぽかんと開けて見ていると、突然体をびくっと震わせて背中を波打たせました。

「あっ、なんか出るう♥　ちんぽから熱いの出ちゃうう♥　止まんない♥　んああっ♥　ああああっ♥　出るうっ♥」

びゅるっ♥　ぴゅるるっ♥

愛衣ちゃんはいきなり、おちんちんから白い液体を飛ばしました。それは勢いよく凜先生のストッキングにかかり、べっとりとこびりつきました。

彼女はぴくぴくと震えて、うわ言のように呟きました。

「んにゃあっ♥　んはああ……♥　射精、しちゃった……♥　ふたなりちんぽで精液出しちゃった……♥　やあ……♥」

「どう？　射精するの、頭おかしくなるくらい気持ちよかったでしょう？　これがふたなりちんぽの強烈な快樂よ♥　一度味わうと、普通の子は毎日射精しないと気が済まなくなっちゃうわ♥」

「やだあ……♥　こんなの知ったら、ダメになっちゃう……♥　気持ちよかったよお……♥」

いまだにゾクゾク♥　と体を震わせている愛衣ちゃんの姿はあまりにもだらしなくて、わたしは正直ドン引きしてしまいました。

だから、凜先生がこう言ってきた時、わたしは首を縦に振れませんでした。

「さて、次は美姫ちゃんの番♥　おちんぽしごいて、たっぷり射精しましょうね♥」

「や、やめてくださいっ」

凜先生から逃げるように、わたしはその場を後にしたのでした。

.....

わたしはそれから数日間、ふたなりちんぽが疼くのを我慢し続けていました。愛衣の射精している姿を思い出すと、うずうずしてたまらなくなってくるのです。

(ダメ……絶対射精しないって、決めたんだからっ)

愛衣ちゃんのようにだらしない射精姿にはなりたくありませんでした。

しかし、ふたなりちんぽはいつの間にか愛衣ちゃんと同じくらいの大きさまで成長し、わたしの意思に反してカチカチに勃起してしまうようになっていました。

ヒクヒクと震えて、苦しそうに、はちきれんばかり……ちんぽは元気を増していき、朝起きたときも、授業中も、放課後も、ずっと勃起し続けるようになりました。

ちょっとだけしごけば、すぐにでも射精して気持ちよくなれるのかもしれない。あれだけ気持ちよさそうにしていたから、よほどすごいただろうだと何度も想像しました。

そして、ちんぽが我慢汁を漏らして刺激を求めてきて、悪魔の囁きが耳に聞こえるようになりました。

一回くらい射精しても大丈夫……他の人が見ていないところで、一回くらいオナニーしてしちゃおう。

好奇心と誘惑に負け、ついつい勃起したふたなりちんぽを触ってみたことは何度もあった。一瞬でなんともいえない甘い感覚が走り抜けて、わたしはそこで我に返ることを繰り返しました。

一度でも射精したら、やめられなくなっちゃうに決まってる。毎日オナニーばかりするようになっちゃう。わたしは誘惑に打ち勝って見せる。

「もういや……ちんぽなんて要らない……っ」

そこに、救いの手が差し伸べられました。

あれから愛衣ちゃんとわたしは、どうにかしてふたなりちんぽを消すことが出来ないか、方法を探していました。

そしてある日、ついに愛衣ちゃんが嬉しそうに話しかけてきました。

「ねえ美姫、聞いて聞いて！」

「なに？」

「凜先生がふたなりちんぽを治す方法を見つけてくれたらしいの！」

それを聞いて、わたしは大喜びしました。

これで、わたしは射精の誘惑から逃れることが出来る。

我慢し続けた甲斐があった、と思う一方で、ちょっともったいないような気がするのも事実でした。一度も射精の味を知らずに、ちんぽを治してしまうのは、なんだか損じゃないか、という念がよぎったのです。

そんなだらしのない自分を押し殺して、わたしは愛衣に話の続きを聞きました。

「どうすれば治るの？」

「えっと、それは……凜先生の口から、直接聞いて？」

「え？　なんで？」

「わ、わたし説明するの下手だから……とりあえず、保健室一緒に行こうっ」

齒に何かが挟まったような言い方でした。

わたしはなんとなく違和感を感じましたが、愛衣に背中を押されて、ぐいぐいと保健室へと連れていかれてしまった。

とにかく、ふたなりちんぽが治るという知らせで舞い上がってしまって、嫌な記憶が残っている保健室にも、素直に入ってしまいました。

「あら、いらっしやい♥　二人とも♥」

凜先生が出迎えてくれて、わたしが話を聞こうとした時でした。

「ごめんっ、美姫……っ」

「え……？」

呆気にとられているうちに、わたしは愛衣に両腕を掴まれて、がしゃりと何かを嵌められました。それは手錠でした。後ろ手に嵌められ、振りほどけませんでした。

助けを求めて凜先生を見ても、妙な笑みを浮かべるだけで、何もしてくれません。

背後で愛衣はひたすら謝っていました。

「美姫、ごめんね……わたし、がまんできなくて……」

「どういうこと……？」

「わたしが愛衣ちゃんにお願いしたのよ」

凜先生はそう言いました。

つまり、全ては凜先生の指示で、愛衣はわたしを保健室に連れてきて、手錠をかけたのです。わたしのふたなりちんぽを、射精させてしまおうとしているのです。

「や、やめてっ！　愛衣、離してよっ」

「ごめんね……」

愛衣は繰り返し謝りながら、わたしを椅子に座らせ、動けなくなるよう椅子に括り付けた。そのまま縄でわたしの腕や足を、椅子に縛り付けてしまいました。

抵抗しようとしても、愛衣は何かにとり憑かれたようにためらいなく縄を巻き付けました。

身動きが取れなくなったわたしの前で、愛衣は凜先生のところに駆け寄りました。

「凜先生、わたし、ちゃんと言われたとおりにやりました♥　約束通り、気持ちいいコト、してくれますよね……？」

「もちろんよ♥ あとでたっぷり二人で楽しみましょうね♥」

「は、はい♥ あ、ありがとうございます……♥」

愛衣の股間では、ふたなりちんぽが勃起して反り返り、スカートを押し上げていた。

愛衣はちんぽの欲求に負けて、わたしを生贄に差し出したのなのです。悲しくて仕方ありませんでした。

「っていうことは、ふたなりちんぽを治す方法が見つかったって言うのも……」

「全部、嘘なの……ごめんね、美姫。ふたなりちんぽは、一度生えたら絶対に治らないの」

「やだ……やだやだあつ、わたしは、普通の女の子に戻りたいのっ！」

「美姫も、きっと一度射精したらわかるよ……あんなに気持ちいいことが出来るんだったら、ふたなりになるのも悪くないよ」

「絶対イヤっ……縄を解いてっ」

わたしの声に応じてくれる人は、この保健室にはいませんでした。

代わりに、凜先生がくすくすと笑って近づいてきました。

「落ち着いて、美姫ちゃん。これからいっぱい気持ちよくしてあげるから、大人しくしててね♥」

「えっ……やめてっ」

このままでは、凜先生に搾り取られてしまう。

今ちんぽを触られたりしたら、すぐにでも射精してしまいそうな気がしました。わたしは逃げることなんて出来ず、足元で凜先生が上品に膝をそろえて屈むのを見ているしかありませんでした。

「ほおら、美姫ちゃんのおちんぽを見せてちょうだい♥」

「いやっ！ 脱がせないでっ！」

凜先生の手が、そろりとスカートをめくりあげ、ぱんつをするするとわたしの足から引き抜いていくのを、抵抗できずに見守るしかありませんでした。

わたしは下半身を丸裸にされ、半勃起になったふたなりちんぽをさらけ出されてしまいました。

こんなにも恥ずかしいところを見られているのに、刺激に飢えたちんぽがムクムクと大きくなり始めているのが悔しくて仕方ありませんでした。

（どうして……勃起なんてしたくないのにっ）

凜先生はそれを見て、嬉しそうににこりと笑った。

「美姫ちゃんの童貞ちんぽ、可愛いわね♥ わたしに脱がされて興奮しちゃったのかしら？ ちょっとずつ大きくなってきてるわよ♥」

「違うんですっ！ これは、勝手に……っ」

「興奮すれば、もっと大きくなるわ♥ わたしのおっぱい見せてあげてもいいわよ♥ ふふ♥」

凜先生はシャツのボタンに指をかけて、外していきます。

紫色のいやらしいブラジャーを下にずらすと、びっくりするくらい大きなおっぱいが姿を現した。

(すごい……柔らかそう……♥)

ついついわたしはそれに見惚れてしまいました。ちんぽが生えてきてから、女性を見ると興奮してしまう自分がいました。視線をその巨乳から外そうとしても、どうしてもじろじろと見つめるのをやめられませんでした。

股間で、ふたなりちんぽがますます固く勃起していきます。ヒクヒクと震えだし、まるで刺激を待ちわびているようでした。

(こんなはずじゃないのに……♥ ああ……♥ ちんぽ、触って欲しい……♥)

ちんぽの先から、我慢汁がトロトロと溢れ出し、どうしようもなく欲望が体を駆け巡りました。

「あらあら、随分スケベな顔になっちゃってるわよ、美姫ちゃん♥」

「イヤあ……っなんで、なんでわたし、先生のおっぱいで興奮してるの……♥ こんなはずじゃないのに……♥」

「欲求を認めなさい？ 一度生えてきてしまったからには、女の子にしごいてもらって、射精したいって思うのは仕方ないことなの♥」

「そんなのやだあ……わたしは我慢して見せるの……」

「どこまで我慢できるかしらね♥ ふふ♥」

そして、凜先生は、細くて綺麗な指で、わたしの醜惡なフル勃起ちんぽを握りました。

血管が浮き出て、パンパンに膨れ上がったオナ禁ちんぽを、優しくさすられたのです。

(27:24)

「ああああっ♥」

勝手に背筋がぴんと伸びて、ぐっと奥歯を噛んで喘いでしまいました。

温かい手のひらでカリ首のところを包皮の上から握られ、上下に動かされるのが、たまらないのです。

凄まじい心地よさが、腰から背中へとゾクゾク♥ と駆け上がってきます。

(な、なにこれえ……♥)

初めて女の人にちんぽをシコられて、わたしは自分が情けない表情になっているのがわかりました。

気持ちが良い……このまま触られたら、頭がどうにかなってしまいそうでした。

「可愛い発情顔よ、美姫ちゃん♥ これまでオナニーもしたことないって、愛衣ちゃんに聞いたわ♪ それだったら、こうなっちゃうのも仕方ないわね♥」

「だ、ダメえっ……♥ それダメですう……♥ シコシコしないでえ……♥」

「ゆっくりしごいてあげるから、たっぷり堪能しなさい♥ ほら、シコシコ、シコシコ……♥」

「いやあっ♥ そ、そんなとこ、こすられたらぁ……♥ ダメ、絶対射精なんてしないっ、しないんだからあっ！」

わたしは必死になって、その身震いするほどの快感をシャットアウトしようとしてました。

別のことで頭をいっぱいにしてました。

中学時代に頑張っていた水泳部。このままちんぽが生えたままだったら、水着を着ることが出来なくなる。夢だった大会出場も出来なくなるし、恥ずかしくてプールにも入れない。

そんなのはイヤ、わたしはこのふたなりちんぽをどうにかして治す……

一度射精したら、後戻りが出来なくなるとわかっていました。

愛衣が凜先生にちんぽをしごかれて、どぴゅどぴゅ射精する姿を思い出しました。涎が垂れそうなほどだらしく口を開けたまま、夢見心地という表情でイってしまう愛衣の姿。

あんな風には絶対になりたくない。わたしは声に出していました。

「やだあっ♥ ああっ♥ ふたなりちんぽから精液出すことしか考えられない女の子になりたくないよぉ〜っ♥」

「我慢しても無駄よ♥ 手コキ快感に溺れて、ぴゅっぴゅっってお漏らししちゃいなさい♥ 誘惑に負けて、ぴゅっぴゅっ♥ っしたら、すっごく気持ちいいわよ〜？」

「やだやだやだ、絶対ヤダっ♥ んああっ♥ 射精したくない、したくないよぉ〜っ♥」

「射精するのは悪いことじゃないのよ？ 一回射精しちゃえば、美姫ちゃんもその良さがきつとわかるわ♥ ヒクヒクしてるちんぽから、白くてドロドロの精液、出しちゃいなさい♥」

「ダメ、気持ちいい……♥ ふたなりちんぽコキコキされるの、気持ちよすぎだよ♥ 無理い、我慢むりい……♥」

手のひらでぎゅっと根元を握り、ちんぽを擦られました。

さらに、人差し指と親指で輪っかを作り、ぬぼぬぼといやらしい動きまでされてしまいました。

（それも気持ちいい♥ 快感漬けでダメになっちゃう♥）

動かす度にくちゅくちゅ♥ と卑猥な音が立ってしまうほど、ちんぽはうれしそうに我慢汁を溢れ出させていました。

腰が浮き上がってしまうほど、快感まみれになったちんぽが暴発しそうになった時——

凜先生はいきなりしごくのをやめて、透明なカウパーまみれの手のひらを、ねちより♥ と離しました。

ぴくぴく、とちんぽはいきり立ったまま震え続け、ダラダラと汁を垂れ流しにしています。

「え……っ？」

「あら、続けて欲しいの？ 射精したくないんじゃないのかしら？」

「そ、そうですっ、わたしは射精、なんか……絶対、しない……」

さっきまで叩き込まれていた快感がなくなって、わたしは少し寂しさを感じていました。

手コキ快樂が恋しくなっていました。

(わたし、なんてだらしのないの……♥ 折角射精を我慢するチャンスなのに、コキコキして欲しくなっちゃってるよお……♥)

「本当にいいのかしら？ もうすぐで射精できそうだったのにね♥」

「ううう……♥ もう十分です、から……もう、わたしのちんぼ、触ら、ないで……♥」

わたしはさっきみたいにシコシコして欲しいと懇願したい気持ちを抑えてそう言いました。

気力を振り絞ってそう言ったのに、凜先生は気持ちいいコトをやめてくれませんでした。

「そんな悲しそうな顔で言われてもね？ 表情が、手コキを続けて欲しいって、言ってるわよ♥」

そして、わたしのちんぼに、さっきとは違う刺激を与え始めました。

根元のところを掴んで、ちんぼの皮を、ぐりぐりと剥いたのです。

「んあぁ♥ やめてっ♥ 皮、それ以上剥かないでっ♥ ズル剥けになっちゃうよお……♥」

「ちゃんと皮はムキムキしないと、不潔なのよ？ ちょっと包茎気味だから、今日は亀頭を丸ごと全部、剥いちゃいましょうね♥」

「だめ、ダメダメっ、そんなに剥いたら、皮が元に戻らなくなっちゃう♥ ふたなりちんぼの先っぽ、無防備にさらけ出しちゃう……あっ♥」

にゅるん♥ と包皮が全て剥けて、真っ赤になった亀頭が丸出しになりました。

初めて外の世界と触れたその部分は、凜先生にふー、ふー♥ と息を吹きかけられるだけで感じてしまうほど敏感でした。

一切触られていないのに、今にも射精しそうになってしまって、必死になって堪えました。

つつ～、っと丸出しの亀頭を指で触れるか触れないかの優しさで撫でられるだけで、ちんぼはヒクヒク震えて喜んでしまいます。

そして、わたしのちんぼはお手入れ不足で、とある状態に陥っていました。

凜先生は、わたしのちんぼのカリ首周りを見て、笑みを浮かべて目を細めました。

「やだぁ、チンカスだらけじゃない♥ いくらオナニーしないからって、お手入れをサボっちゃだめよ？」

確かに、わたしのカリ首にはカスがこびりついていました。これまで一度も剥いたことがなかったんだから、仕方ありません。

凜先生は舌なめずりをして、わたしにいやらしい笑みを浮かべた。

「こんなに汚いと、お掃除してあげないといけないわね♥ 今日は特別に、わたしが口でチンカスを全部こそげとってあげる♥」

「や、やめてえええっ♥ そんなことしたら、絶対射精しちゃうっ♥ フェラなんてわたしの童貞ちんぼが、我慢できるわけないっ♥」

「さっそく、お掃除始めるわね♥ あーむっ♥んん…んん♥」

ぱくりと、凜先生のエッチなお口が、わたしのチンカスだらけのちんぼを咥えこみました。厚ぼったい唇が、ぴったりと吸い付いています。

涎がいっぱい溜まった、温かい凜先生のお口のナカに包まれました。

ちんぼの根元から先まで染みわたるような、強烈な快感が来ました。ちょっとでも気を抜いたら精液が漏れちゃいそうで、わたしはなんとか堪え続けます。

咥えられているだけなのに、気持ちがよかったのです。少しでも舌でべろべろされたり、じゅるじゅると吸われたら、すぐにでも射精してしまう自信がありました。

（もう、ダメかも……♥　すぐそこまで、精液来てる……♥　わたし、だらしのない顔して精液びゅるびゅる出す、変態ふたなりっ娘になっちゃうんだ……♥）

諦めの念を抱いたと同時に、凜先生は強烈なバキュームを始めました。頬がぺったりとちんぼに張り付くほどの吸引です。

「ジュるるるじゅるじゅるるるるるうっ♥　ずずずりゅるるっ♥」（39:11）

そして、同時に分厚い舌がカリ首の周りにこびりついたチンカスをこそげとるように、ぐるりと一周するようにねっとりと絡みついてきました。

もう本当に限界でした。頭が真っ白になって、ただただメスちんぼ欲求でいっぱいになっていました。

（射精したい射精したい射精したいっ♥）

わたしはついにコルクの栓を抜いたような解放感と共に、一気に精液を出していました。

「イク♥イクイクイクう♥　んんん〜っ♥」

「あっ、あんっ♥　あぁっ……♥　出る出る出る、とまんないっ♥　ちんぼ汁が勝手にい……♥」

びゅ〜っ♥　びゅくっ、びゅくっ♥　ぴゅるぴゅるるう……♥

わたしはこれまで感じたことのない、ありえないほどの気持ちよさで全身を震わせながら、絶頂していました。（40:29）

射精は何度も続き、その間凜先生はわたしのチンカスを念入りに舐めとり続け、鈴口から溢れる精液をちゅうちゅう吸い取り続けてくれていました。

その刺激でまた気持ちよくなってしまい、なかなかちんぼの脈動は終わりません。

何もかも搾り取られたような達成感と共に、わたしは射精を終え、全身を包む気怠さと幸せたっぷりの余韻に身を預けてしまっていました。

きっと今頃、あの時の愛衣と同じようなだらしのない顔をしているんだろうな、と想像がついても、もうどうでもよくなっていました。

（き、気持ちいい……♥　こんなの、ハマるに決まってる……♥　毎日射精しないと、正気じゃいられなくなっちゃう……♥）

なんとか正気に戻ったころには、凜先生は、口の中にたっぷりと精液とチンカスを溜めて、わたしに見せつけていました。（41：48）

そして、ゴクリ、とそれらを全部呑み込んでしまいました。

「美姫ちゃんのザーメンとチンカス、濃厚ですごく臭かったわ♥　ずっとオナ禁してたせいかしらね♥」

おいしそうににっこりと笑って、凜先生は口元の残りの精液を舐めとった後、ハンカチで拭きました。

その時から、わたしはダメになってしまいました。

おちんぼの欲求に抗えず、オナニーをしないではいられなくなってしまったのです。

でも、おちんぼが生えてきて、良かったんです。こんなに気持ちよくなれるんですから……

♥

（編集時に組み込む音）

（美姫の押し殺したような喘ぎ声）　んん、んん…♥　ああ、あああ♥　んん、んうう♥
あん、あん♥　ああ、はあああ、♥　はふう♥　ふう、ふう…♥　あう、あうう♥

（愛衣のみっともない喘ぎ声）　んにやあっ♥　ああ、ああん♥　だめ、だめえ♥　んあ、ああん♥　ああ、ああああ♥　ん、んにや、ん、んん～♥　きもちい、ああ、ああ♥

（凜先生がちんぼを舐め吸い取る音）　れろれろれろお、えろえろえろえろお♥　んふ♥んじゆる、じゆるじゆるじゆる♥　んん、れろれろえろれろお♥　じゆる、じゆるるるう♥じゅじゅじゆるるる…

（凜先生が精液を呑み込む音）　んく……んく、んん…んぷあ♥

2　オナニー、我慢できないんです……

（興奮しすぎて頭がおかしくなっている美姫の独白）

あの…今、すごくムラムラしてるので、オナニー、しようと思います……

本当は、プールの時間なのですが……生理だって、ウソをついて、教室に一人でいます。

アソコがウズウズして、仕方ないんです……♥　ほんとに、しょうがないんですよ……♥

おちんちん、出しますね……♥

ふああ……♥　こんなにおっきくなって……♥すっかり固くなって、刺激を求めるかのようにヒクヒクと震えているんです……♥。

実は、隣の可愛い子の下着を、拝借しています……♥　さっきまで履いていた、脱ぎたての奴、です……♥

これの匂いを嗅ぎながら、シコシコしたら、絶対気持ちよくなれます……ふふ♥

しょうがないんです……一度勃起したら、抜かないと、他のこと何も手に着かなくて……わたしは、わるくないんです……♡

それじゃあ、おちんぼに指で触れていきますね……♡

オナニーだなんてみっともない、という気持ちもありますが……しごき始めるとそんな気持ちは掻き消えて、しまいます……♡。

「あっ♡ ああ♡ これ、気持ちいい……♡ どうしよう、止まなくなっちゃいそう……♡」()

ちんぼのかり首から、根元にかけてを握って、皮の上から上下に動かします。わたし、敏感なので……皮を剥ききらないままのほうが気持ちいいんです……♡

シコシコ、シコシコ……あん♡ やだ、手、止まなくなっちゃう……♡

わたし、変態みたいな格好で、おちんぼしごいてます……ひざをちょっと曲げて、腰を突き出しながら、甘い声、漏らしちゃってます……♡

さらに、下着の匂いを嗅ぎながら、オナニーつづけていきます♡

「んあ♡ 女の子の良い、匂い……♡ おまんこの匂い、する……♡これでシコるの、たままないっ♡」

勝手にしごくスピードが上がっていきます……すぐ、のめりこんじゃうんです♡やっぱり、下着っていうオカズがあると、普段より夢中になっちゃいます♡。

あの子、わたしがこんな気持ち悪いことしてるって知ったら、どう思うでしょう……♡

絶対軽蔑して、わたしのこと、嫌いになっちゃいます♡ そうわかってるのに、やめられない♡

ああ♡ あああ♡

我慢汁がダラダラ鈴口から垂れて、手にべっとりつきますけど、そんなことは気になりません……♡。

「ふう♡ ふう♡ ダメえ♡ こんなことばかりしてちゃ、ダメなのにい♡ 最高、シコシコ最高……♡ はああ♡」

教室の窓ガラスに映るわたしの表情はすっかり快楽に浸って、とろけきっています♡

口の端から涎が垂れちゃって……♡ 腰を小刻みに振って、少しでも刺激を増やそうと躍起になっているただの変態メスちんぼふたなりです♡

「あっ♡ 出そうになってきたあ♡ 精液びゅるびゅるしちやいそうっ♡ 」

わたし、早漏なので……すぐ、限界が近づいてきました♡ 下着をおちんぼに持って行って、直接それでしごきます♡

「ごめんなさい、わたし、変態でごめんなさい♡」

柔らかい布の感触が、たまりません……♡ はああん♡ おちんちんが喜んでいるのがわかります♡

ほんとうは、あの子を犯したくなったり…でも、そんな勇氣はないので……こうやって一人寂しくオナニーします♥

ふう、ふう♥ でも、いいんです……♥誰にも迷惑かけないで、気持ちよくなるには、コレが一番です♥

ああああ♥ 気持ちいい……♥ この快感は、ふたなり冥利につきます……♥おまんことか、クリとかいじるより、全然気持ちいいんです♥

ううう♥ あああ♥ 全身がゾクゾクして、脳味噌が溶けそうな快楽です……♥

どんどん頭、バカになってく気がします♥ ふああ♥ なんで、おちんぼしごくだけでこんなに気持ちいいんですか♥ 気持ちいいのが、いけないんです♥ ああ♥ こんなをやめられるわけない……♥

あああ♥ あああああ♥ もうダメえ♥

おちんぼ気持ちいい♥おちんぼ♥おちんぼ♥

はふう♥ あうう♥ おちんぼに熱いのが込み上げてきました♥ 頭がぼおっとして、キンタマがきゅっと持ち上がって、一気におちんぼがびくって、なって……♥

あっ、ああっ♥おちんぼ気持ちいい、来ます、すごい来ます……っ♥

ダメダメ、イク、イクイクう、イっちゃう〜♥——うぐうっ♥

んん〜っ♥あっ、ああ〜っ♥ 出てるう、白いのびゅ〜って♥ これダメ♥ 頭変になるう♥ 気持ちよすぎい♥ 射精気持ちよすぎい♥

ああ、ああ、ああ……あう、うう♥ はう、ふう、ふう……♥

やっと落ち着きました……♥

勢いよく吹き出した精液が、あの子の下着にべっとりこびりついてます。受け止めきれなかった分は、机に飛び散って、それでも射精はなかなか収まりません。

いくつもの白い筋が床にタラタラと垂れています…。

一通り精液を出して、ようやくしごく手の動きが落ち着きます。射精後の開放感でその場でへたりこみました。またやってしまった……と思いながらも、内心大満足です♥

あ、下着、汚しちゃったの、どうしましょう……きっと、なんとかあります♥

「気持ちよかったあ……♥」

大体一日に一回、こうやってオナニーしちゃってます……♥ もちろん、普段はもっと大人しく……トイレとかでしますけどね？ ふたなりって、意外と悪くないですよ……♥

(おわり)